

ラージャスターンのボーパと絵解き語り
—叙事詩空間におけるラーマ物語との関係性を中心として—

The Bhopa and Oral Epics/Pictorial Narratives in Rajasthan:
Focusing on an Analysis of Rama Story in the Painted Scroll or ‘*par/phad*’

田 森 雅 一

TAMORI Masakazu

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: sarod0805@yahoo.co.jp

Abstract:

Rajasthan is a dry land located in northwest India, bordering Pakistan. Most of it is desert, and many kings and warriors called Rajput competed for power there. It is said to be the homeland of Gypsies/Roma living in Europe, and many groups that live there make a living from music and entertainment even today.

This paper examines the large cloth paintings used in folk epics for picture-telling performances by Bhopa of Rajasthan who used to work as entertainers to their patrons, focusing on the narrative structure that unfolds in the epic space and the various episodes incorporated therein, particularly in relation to “Rama story”.

1. はじめに

ラージャスターンは、パキスタンと国境を接する北西インドに位置する乾いた大地である。その大部分は砂漠地帯で、ラージプートと呼ばれる王侯・戦士たちがその勢力を争い合った。また、ヨーロッパなどに暮らすジプシーたちの原郷ともいわれ、音楽・芸能を生業とする集団が今も数多く暮らしている。彼らの多くはパトロン的人生儀礼や宗教儀礼などにおいて重要な役割を果たしてきた。本稿では、ラージャスターンのボーパ *bhopa* による民俗叙事詩のうち、パーブージーの絵解きパフォーマンスに用いられる大型の布絵、すなわち叙事詩空間で展開される物語構造とそこに組み込まれた各種のエピソード、とりわけ「ラーマ物語」との関係性に焦点を当てて検討を試みる。

2. ボーパについて

2-1) ボーパの定義

ボーパあるいはボーパ *bhopo* は、特定の英雄神に奉仕し儀礼を執り行う非バラモン司祭の総称とされることも少なくない。バラモンが管理するヒンドゥー寺院においては、シヴァ神やヴィシュヌ神といった大伝統的な神々が祀られるのに対して、ボーパは小伝統的な民俗英雄神への儀礼を執り行う。また、蛇毒・疫病・精神病の治療、失踪した家畜の行き先の探索など、人間が解決できない苦難に対して異界との媒介役となり、超越的な力を発揮する「霊媒師」「治療者」でもある [Blackburn 1989: 241 ; Jhosi 1976: 29-30 ; 三尾 1995]。

2-2) ボーパの種類

ボーパは、儀礼の対象となる主人公・主神、儀礼のパトロン、パフォーマンスの形態（語り、歌・音楽、踊り、用いる楽器など）によって分類可能である。そのうち、「パーブージー *Pābūjī*」及び「デーヴージー *Devjī* あるいはデーヴナラーヤン *Devnārāyaṇ*」を主人公・主神としてパフォーマンスを行うボーパの中にはパド (*paṛ, phaḍ*) と呼ばれる横断幕的な大型の絵巻物を開帳し、その前で儀礼とパフォーマンスを行う者たちがいる。パドは移動寺院でもあり、移動先での開帳とともに儀礼が行われる。そのパフォーマンスでは、絵解き語りに加え、歌と踊り、弦楽器の演奏も含まれる。

2-3) ボーパが用いる絵図 (パド)

パドの絵巻物は、捺染を生業とするチパー *Chipā* に属する絵師ジョーシー *Joshī* によって描かれる。彼らはラージャスターン南東部（メーワール地方）のビールワラー *Bhīlwārā* とシャープラー *Shāhpurā* に集中している。パドはボーパのパトロンによって絵師

に発注され、その細部の配置や表現についてはボーパと絵師によって決められる [Joshi 1976: 10]。

現存する最も古いものは、1867年に描かれ、ルパーヤン・サンスターン¹⁾が所蔵しているデーヴジーのパドとされる [Smith 2005: 39]。古くなったパドは、プシュカール湖に沈めて供養されるのが慣例であるため、それ以前のパドがどのようなものであったか、またパドの使用がどこまで遡れるかは不明である。しかし、後述するトッド James Tod によれば「パーブージーの行いを唱える間中、絵図が展開される」とあり [Tod 1987 (1920): 843]、パドは少なくとも19世紀初頭以前から用いられていたことは間違いないだろう。

デーヴジーのパドを用いるボーパはシャープラーとナーガウル県のランバーLānbāに集中しているのに対し、パーブージーのパドを用いるボーパはラージャスターン北西部のほぼ全域に分布している。その理由は、叙事詩の主人公・主要登場人物やパトロンの属性の違いによるものと考えられる。すなわち、デーヴジーの主なパトロンがグージュール Gūjar という半農半牧の民であるのに対して、パーブージーのパトロンが牛や駱駝、羊などの牧畜を生業とするレバーリー Rebārī やライカー Rāikā などの遊牧民からジャートなどの農民、そしてラージプートに広く及んでいることによると考えられる。

2-4) パフォーマンス形態

パーブージー・ボーパによるパフォーマンスにはパドを用いるものと用いないものがあるが、使用楽器などの違いにより、以下のような3形態に分類可能である [Bharucha 2003b]。

- ・ **マター・ボーパ**：コールー Kōlū の寺院で行われるパドを用いない形態。

ナーヤク Nāyak の二人の男性がペアとなって歌唱する²⁾。マター *mātā* と呼ばれる壺を打楽器として用い、舞踊のような動作は伴わない。

- ・ **ラーヴァンハッター・ボーパ**：場所を問わずにパドを用いて行われる形態 (図1)。

ナーヤクの男女ペアで行う。主奏者(男性)はラーヴァンハッター *rāvanhatthā/rāvanhattho* と呼ばれる擦弦楽器を用い、歌い・語り・踊る。副奏者の女性はボーピー *bhopī* と呼ばれ、語られるエピソードの図像にアーラティー *ārati* を捧げたり、主奏者の歌唱を補佐したりする。

1) 本施設はインドの民俗／民族音楽学研究者兼オーガナイザーであったコーマル・コターリー Komal Kothari (1929-2004) 氏がジョードプルに設立したラージャスターン民俗芸能の博物館・研究所である。

2) ナーヤク・カーストはトリーという蔑称で呼ばれることもある。ナーヤクの機能については文末資料1-1 & 1-2も参照のこと。ボーパは今日ではビールを名乗る傾向にあるという [Bharucha 2003a: 111-112]。

・ **グジャリ・ボーパ**：場所を問わずにパドを用いて行われる形態。

ビール Bhir の男性二人で行われる³⁾。主奏者（男性）はグジャリ *gujari* あるいはナレリー *nareli* と呼ばれるラーヴァンハッターよりやや小ぶりの擦弦楽器を用い、歌い・語り・踊る。女装した男性の副奏者は、語られるエピソードにアーラティーを捧げ、主奏者の復唱や踊りなどを担当する。ラーバナハッター・ボーパの形態よりも娯楽性が高いとされる。このような、二人で歌い・語り・踊り、楽器演奏を伴う形式は、ヴァールミーキの『ラーマヤナ』に記された、クシャとラーヴァのくだりを思い出させる⁴⁾。

3. パープージーの叙事詩

3-1-1) 民俗叙事詩及びボーパに関する主な研究

最初にインドやラージャスターンにおける民俗叙事詩、およびボーパに関する主な研究書を挙げておく（一部）。本稿においても、これらの研究を参照した⁵⁾。

- ・ インドの民俗叙事詩に関する総合的研究：*Oral Epics in India* [Blackburn 1989]
- ・ ラージャスターンの音楽芸能に関する人類学的研究におけるボーパとその現状：*Bard, Ballad and Boundary* [Neuman and Chaudhuri 2007]
- ・ ラージャスターンの絵解き及び絵師に関する研究：*Painted Folklore and Folklore Painters of India* [Joshi 1976]
- ・ パープージー叙事詩の総合研究：*The Epic of Pābūjī: A Study, Transcription and Translation* [Smith 1991 ; 2005 ; 2015]
- ・ デーヴナラーヤン叙事詩の総合研究：*Nectar Gaze and Poison Breath* [Malik 2005]

3-1-2) 歴史資料における記述

パープージー叙事詩がいつ頃成立したかは定かではない。17世紀中葉、マールワール地方の支配者であったラートール王家のジャスワント・シング Jaswant Singh (1629-1678) に仕えた廷臣ナインシー Mumhatā Naiṅasī (1610-1670) が中期マールワール語で編纂したラージャスターン史『ナインシーリー・キヤータ *Naiṅasī rī khyāta*』の中に、「パープー

3) ビールはインド西部に暮らす民族。多くは丘陵地帯で部族生活を営み、かつては匪賊としても知られたが、今日そのほとんどが農耕を生業としている。宗教生活では、ヒンドゥー教の影響を受けながらも、土地神崇拜や死者崇拜などの点で独自の特徴を有するとされる。

4) ラーマの行状を後世に伝え広めるにあたり、「ヴァールミーキはクシャとラヴァの二人に詩篇ラーマヤナを教えた。この詩篇を朗読しても歌っても調子よく、三拍子で7つの韻律に適用され、弦楽器の伴奏で歌えるようにした」[岩本1980: 25] というのがそれである。

5) 日本における紹介等については小西 [1988 ; 2001] などを参照のこと。

ジーの記録 *Vāta Pābūjī rī* [Sākariyā 1984: 58–79] がある。また、20世紀初頭にラージャスターンの碑文と口頭伝承について調査を行ったイタリア人のインド研究者で言語学者のテシットーリ Luigi Pio Tessitori (1887–1919) の報告書にはこの「ナインシーリー・キャータ」の英文抄訳が含まれている [Tessitori 1916: 110–14]。

イギリス東インド会社の官僚・軍人で東洋学者の James Tod (1782–1835) は、欧米人としてラージャスターンについて詳細な記述を残した最も初期の人物である。彼の代表著作 *Annals and Antiquities of Rajasthan* の「英雄のイメージ」の節において⁶⁾、「(パーブージーは)ラージャスターンに初めて駱駝をもたらし、牛を守ったラートルの首長」[Tod 1987 (1920): 843, n2] と記述している。また、著名な軍馬である「黒いカエサル Black Caesar (Kesar Kali)」に跨がるパーブージーの功績について、図像 (図2) を掲載しつつ描写し、「リズムを用いて吟唱する放浪の吟遊詩人や芸人がおり、砂漠の村々を回ってこの戦士の行いを喧伝するのが彼らの仕事である」と述べている。

3-2) 歴史的背景

20世紀初頭にラージャスターンの碑文と口頭伝承について調査を行ったテシットーリの報告によれば、パーブージーの叙事詩は14世紀初頭を舞台にしているという [Tessitori 1916: 106–9]。主人公のパーブーは、ラージプートのラートル Rāthor 氏族の出自とされているが、ジョードプルを中心とするマールワール王国の当時の勢力については語られていない。物語の中心地は、ジョードプルとジャイサルメールのほぼ中間にあるコールー Kolū という村落である。登場人物であるラージプートの氏族名から、北西インド一帯を統一した後にムハンマド・ゴリーに敗れたチャウハーン Chauhān 諸氏族などがまだ勢力を保っていた時代、すなわちテシットーリが推測するように14世紀初頭前後が妥当と考えられる。

3-3) テキストの起源と編成

パーブージーが本拠地としたとされるコールーは、彼が支配したことで知られているわけではなく、叙事詩が広まることによって知られるようになったと考えられる。スミスの主要インフォーマントであるパルブー・ボーパ Parbū Bhopa によれば、「叙事詩のテキストはラージプート付きの系譜管理者であり宮廷詩人であったチャーラン Chāraṇ によって書かれたパーブープラカーシャ Pābūprakāśa という本が元になっており、その本はコー

6) 本節では、Ramdevji/Ramdeo や Gogaji などの他の英雄神についても述べられている。「グーガ Gūga/Goga はチャウハーンであり、マフムード (在位997–1030) がサトレジ河を渡るのを阻止しようとした」[Tod 1920: 843; 807] とある一方、ノートには「グーガジーは、13世紀末にデリーのフィールーズ・シャーとの戦いで敗れ殺された」[Tod 1920: 843, n5] と記述されている。

ルーの寺院に保管されている。そして、そのテキストをナーヤクが学び⁷⁾、口承によって広めていった」[Smith 2005: 20 ; 2015: 11-13] という。すなわち、彼の説によれば口頭伝承がテキスト化されたのではなく、テキストが口頭伝承によって広がったもので、その偏差は後の時代の産物であることになる。

また、そのテキストは数多くのエピソードからなるが、全体はパルヴァーロー *parvāro* とサーイル *sāyl* という 2 部構成である。前者は「エピソード (出来事)」を意味し、人間としてのパーブージーの生き様を描く物語の本編で、その誕生から死まで。後者は「請願」を意味し、死後に天に昇って神になったパーブージーによる秘蹟 (願い事の成就) を扱っている。全体ではパルヴァーロー 12 編とサーイル 24 編からなるとされる。しかし、サーイルについては、その全容を知るものはおらず、せいぜい 1 ~ 3 編しか知られていない。また、パルヴァーローは、叙事詩の歌謡部分であるガーヴ *gāv* とエピソードの語り (解説) であるアルサーヴ *arthāv* からなる。パドに描かれた叙事詩全体のパフォーマンスを全て行うには 10-12 夜が必要とされ、全てを一人の人間が行うことは不可能で、その場によってパフォーマンスのエピソードが決められることが多い。あるボーパは「一人のボーパが語れるのは一晩分だけ。それならば、12 人のボーパが集まれば十二夜分の物語が構成できるか」というと、そうではありません」と答えている (巻末資料 1-3 参照)。

3-4) 主な登場人物と相関関係

主人公はパーブージー。その父はラートル・ラージプートのダーダル *Dhādal*、母は天女 *apsarāh* / 妖精 *parī* のケーサル・パリー *Kesar-parī* である。家族は妹のペーマ *Pema*、異母兄のブロー *Būro* と異母姉のソーナ *Sona*、そしてブローの長女ケラム *Kelam* と長男ルーパナート *Rūpanāth*。パーブージーの婚約者のフルワンティー *Phulvantī* (ソーダ氏族)。パーブージーの 4 人の家臣、すなわちチャーンド *Chāndo* とデーンボ *Dhenbo* の兄弟 (バゲーラ氏族)、サルジー *Saljī Soḷānkī* (ソーランキー氏族)、ハルマル *Harmal Devāsī* (レバリー) は重要な役割を果たすが、ナインシー版では「家臣は 7 人でトリー *Thori* の兄弟」とされている。さらにチャーラン女性デーヴァル *Deval* と宿敵であり妹ペーマの夫でジャーヤル *Jāyal* 王ジンドラーヴ・キンチー *Jindrāv Kīnchī* などが登場する。なお、パドに描かれた登場人物の服装や持ち物、また乗り物の動物などは個別の色で識別されている。例えば、名将デーンボの服装は緑色、パーブージーの牝馬ケーサルは黒色、ゴージー・チャウハーンの馬は青色などのようにわかりやすく表現されている。

7) ナインシーは、ナーヤクではなくトリーというカースト用語を用いている。トリーは匪賊とされる一方、ナーヤクは自分たちのルーツがラージプートであったと考えている。

3-5) シノプス/全体構成：人間パーブージーの物語（図3）

ボーパの歌い語りによる人間としてのパーブージー（以下、パーブー）の物語は、以下のような12の出来事 *parvāro* から構成されている⁸⁾。括弧内 [] の数字はパドに絵画として図示されている100シーンのうちの割り当て数である [cf. Smith 2015: 12-13]。

- (0) 占星術編 [4]：神の化身としてサフランに包まれパーブー誕生。その出生秘話と4人の家臣たちの氏素性、そして宮廷の様子が語られる⁹⁾。
- (1) 野兎編 [3]：兄ブローローが野兎を追って他国のジャーヤルに。そしてキーンチー氏族の王サーラングデーの宮殿に入り侮辱される。パーブー家臣デーラボがサーラングデーを討つ。パーブーは、その息子ジンドラブと姉のペーマを婚約させ手打ちを図る。
- (2) 牝馬編 [1]：チャーラン女性デーヴァルに対し、牝馬「黒サフラン(Kesar Kālamī)」¹⁰⁾を譲ってくれるなら、彼女の家畜をいついかなる場合でも死んでも守る」と約束する。ケーサル・カラーミーはパーブーとの再会に狂喜し、彼を乗せて天を駆ける。
- (3) パータン編 [2]：牛殺しのグジャラートのパータン Pātaṅ 王ミルザー・カーンとの戦い。勝利の後、パーブーはラームデーヴら4人の聖者とともにプシュカールへ。
- (4) プシュカール編 [1]：プシュカール湖で沐浴しようとして足を滑らすパーブー。彼を助けたのはサーンバル Sāmbhar の王子で蛇神ゴーゴ・チャウハーンだった。パーブーは、彼と兄ブローローの娘ケーラムの婚約を約束してしまう。
- (5) ゴーゴの婚姻編 [21]：ブローローとその妻に反対されるも、策をもってゴーゴとブローローの娘ケーラムとの結婚をまとめる。ケーラムは結婚祝いとして、ランカー Laikā にいるという赤褐色の牝駱駝が欲しいとねだり、パーブーは願いを叶えること

8) 文末資料1-3も参照のこと。

9) 物語はパーブーの誕生譚から語られる。そこで明らかにされるのは異類婚姻譚というべきものである。すなわち、父親のダーダルはラージプートであるが、母親は天女・妖精である。通常のパドには描かれたり語られたりしないが、ナインシー版では、その出会いが記述されている。ダーダルが月夜に湖を通りかかった時、天女が水浴びをしているのを目撃し、その羽衣を隠してしまう。ダーダルはある約束をしてこの天女と結ばれる。この天女の名は、「サフランの妖精」を意味するケーサル・パリー Kesar-pari。ダーダルは彼女をコールーに連れて帰り、彼女はそこでパーブーを生む。二人の約束とは「自分を訪ねる場合は、門前で必ず咳払いをする」こと。しかし、ダーダルはその理由を知りたがり、ある時そっとパーブーを育てているところを覗いてしまう。そこで見たのは、牝虎がパーブーに乳をあけているところだった。ケーサル・パリーは約束を破ったことを咎め、「パーブーが12歳になったら会いに来る」と言って天に去ってしまう。これは、「鶴の恩返し」などと類似点を有する。結局、パーブーは、デーヴァルとの約束によって、「黒サフラン」を意味するケーサル・カラーミー Kesar Kālamī を手に入れるのだが、この牝馬こそが分かれた母親であり、この牝馬をめぐるキーンチーとの争いが、パーブー叙事詩の縦糸となっていることは重要である。結局、天かける牝馬である母親によって導かれ、死後に昇天することになる。

10) 日本語での内容の一部は、文末資料2-1も参照のこと。

を約束する。

- (6) 牝駱駝編 [25]：家臣のハルメルが7つの海の果てにあるランカーを偵察に出かける。ランカーから牝駱駝を解放するためのラーヴァナとの戦いが起こる。戦いに勝利し、牝駱駝をラージャスターンに連れて帰る途中、シンドのウーマルコート Ūmarkoṭ でソーダ Sodha 氏族の王と面会する。王女フルワンティーはパーブーを見て恋心を抱く。
- (7) デーヴナラーヤン編 [上記に含まれる短編]：約束通り、ケーラムに牝駱駝を引き渡すためにウーマルコートからサーンバルに戻る途中で、デーヴナラーヤン（デーヴジー）と出会う。通行料として牝駱駝を要求され、デーンボは彼の宰相を殺してしまう。
- (8) パーブーの婚姻編 [13]：パーブーへの結婚の申し込みが来るが断る。しかし、「息子がいなければ祖先供養ができない」という家臣たち勧めにより、パーブーは婚姻式への隊列をサフラン色に染めることを条件に承諾する。
- (9) サフラン編 [上記に含まれる短編]：サフランを独り占めするムスリム王ラックー・パターン Lakkhū Paṭhān との戦争に牝馬「黒サフラン」の活躍により勝利。結婚の準備を進め、神々や親戚を招待するが、キーンチャーは来ない。ウーマルコートに向かおうとするパーブー一行をデーヴァルが止め、誰が私の家畜を守るのか問いただす。しかし、パーブーはウーマルコートに向かい結婚の儀式は進められる。あと少しで結婚式が完了というところでデーヴァルからの依頼、すなわちキーンチャーにより略奪された家畜の奪還という約束を果たすため、連絡用の鸚鵡を婚約者フルワンティーに渡してコールーに引き返す¹¹⁾。
- (10) デーヴァルの牛編 [10]：盗まれた牛や家畜を取り返すためのキーンチャー軍との戦い。デーンボの獅子奮迅の戦いによりキーンチャー軍を全滅させ家畜を奪還する。しかし、パーブーはデーンボの反対にも拘らず、敗れた妹の夫キーンチャーを殺さずに放免。一方、深手を負ったデーンボは命を落とし天に召される¹²⁾。キーンチャーを生かし、デーンボが亡くなったことが仇となる。
- (11) バーティー戦争編 [5]：キーンチャーは性慾りも無く、叔父のバーティー-Bhāṭī に加勢を依頼し、再び戦争に。パーブーたちはレバーリーの大軍勢を味方につけ奮戦する。パーブーは、自分の剣をキーンチャーに渡し（武器を交換し）、自らを討たせる。そして、妖精の神輿に乗って「黒サフラン」とともに昇天する。残された3人の廷臣は自決する。パーブーは天から、ラージプート、ビール、レバーリーの血を一つに混ぜよ

11) 日本語での内容の一部は、文末資料2-2も参照のこと。

12) デーンボは「次に皆で会いオピウムを吸うのは点にあるラーマの宮廷で」と言って息絶える。

と遺言する。一人残された兄ブローローは、キーンチーに首をはねられる。

- (12) サティイー編 [14]: パーブーの婚約者／妻フルワソティイーとブローローの妻は、夫の死を知りサティイー（殉死）を決心する。ブローローの妻は身ごもっており、サティイーの前に密かに乳母に預ける。その男児（ゴゴと結婚したケーラムの弟）はルーパナート Rūpanāth と名付けられる。彼はのちに、デーヴァルから自分の生い立ちを告げられ、キーンチーに復讐を誓う。彼はゴラクナートの加護を受け、キーンチーに嫁いだ叔母ペーマの助力を得て復讐を果たす。ペーマは、サティイーを遂げる。ルーパナートはパーブーの墓にキーンチーの首を捧げ、王となることなくゴラクナートの弟子となり苦行者として余生を送る。

上記12編のうち、(7) デーヴナラーヤン編と (9) サフラン編は、それぞれ前の編に組み込まれた短いエピソードである。最も長大なのは、ランカーでのラーヴァナとの戦いを含む (6) 牝駱駝編の25シーン（パドに描かれた絵図数）と (5) ゴゴの婚姻編の21シーン。続いて、(12) サティイー編の14シーン、(7) パーブーの婚姻編の13シーン、(8) デーヴァルの牛編の10シーンで、他は数シーンと短い。なお、ゴゴ及びパーブーの婚姻では、パド中に図示された10の神々が招待され、それぞれの神々への讃歌が歌われる¹³⁾。

4. パドの叙事詩空間と「ラーマ物語」

4-1) パドの空間分析①：地理空間と親密空間（図4）

絵巻に描かれた物語空間は、中心と周縁を有している。その中心はコールーであり、パーブーの宮廷である。その宮廷には主人公のパーブーと4人の廷臣が配置されている。

その左側（西側）に控えめに異母兄ブローローの宮廷が、その左側にはシンド地方のソーダ氏族のウーマルコートが配置されている。そしてその左端（西端）に位置しているのが、ランカーである。ランカーとの境には、インダス河あるいは海が魚とともに描かれており、そこが島あるいは周囲から隔絶された場所として表現されている。

一方、右側（東側）にはチャーラン女性デーヴァルの屋敷、その東にはプシュカールや、サーバルのゴゴ・チャウハーンの宮廷など友好国が配置されている。そして右端（東端）には宿敵キーンチー氏族の宮廷と同盟国パーティー氏族の宮廷が配置されている（以下参照）。

13) 10神の名は以下の通り [Smith 2015: 13]。1) ガネーシャ Gaṇeśa、2) ヴェーマター Vemātā、3) クリシュナ Kṛṣṇa、4) ラームデーヴ Rāmdev、5) ハヌマーン Hanumān、6) シヴァ Śiva、7) バイルー Bhairūn、8) ジョグマーヤー Jogmāyā、9) ボーミヤーギー Bhomiyājī、10) サルワン・カーヴァリョー Sarvaṇ Kāvāriyo。

極西（左端）：ランカー（インダス河の彼方）→ 羅刹王ラーヴァナの本拠地
 西方（左側）：ウーマルコート（シンド）→ フルワンティーの故郷（ソーダ氏族）
 中央：コールー（ジョードプル県）→ パーブージーの本拠地
 東方（右側）：プシュカール（アジメール県）→ ゴーゴー・チャウハーンのテリトリー
 極東（右端）：ジャーヤル（ナーガウル県）→ 宿敵キーンチャーと同盟国パーティー

実際の地理との整合性は概ね保たれているが、パーティーの本拠地ジャイサルメールはシンドに近い。すなわち、中心にパーブーのコールーの宮廷が、そこから最も遠い周縁である左端（東端）と右端（西端）に敵国ランカーとジャーヤル及びその同盟国が配置され、中心と周縁の間に友好国であるソーダ氏族のウーマルコートと、チャウハーン氏族のサーンバーが配置されていることから、地理性よりも親密性を重視した空間構成と考えられる。

また、パドの上部（北方／北西部）は天界であり、結婚式に招待される神々の姿などが配置されている一方、下部（南方／南東部）ではパーブーやその家臣たちの死、戦闘や殺戮、サティーなどの出来事が起こる場所でもある。

4-2) パドの空間分析②：エピソードの配置と流れ

縦糸としての物語は、中央でのパーブー誕生のエピソード（E0）から東側のジャーヤルでのキーンチャーとの確執の始まりのエピソード（E1）へ。そこから中央のデーヴァルの屋敷での馬の姿の母親「黒サフラン」との再会を経て（E2）、西側のパートン（グジャラート）でムスリム王との戦争に至る（E3）。そこから西方に移動しプシュカールでのゴーゴー・チャウハーンとの出会いを経て（E4）、兄娘ケーラムとゴーゴーの結婚式が中央のコールーで執り行われる（E5）。ケーラムの願いを叶えるため、西端のランカーでラーヴァナと戦闘からコールーに戻る帰路のウーマルコート（シンド）でフルワンティーと出会う（E6, E7）。牝駱駝をケーラムのいるサーンバーに届けてから、フルワンティーとの結婚式のため再びウーマルコートに向かうが、そこでデーヴァルから帰還要請が届く（E8, E9）。結婚式の半ばでキーンチャーとの対決のために、ジャーヤルに向かい戦死する（E10, E11）。

このように、パドの物語空間の中でパーブーはラージャスターンの東西、そしてシンドやグジャラート、さらにはランカーまでをめぐり往來していることがわかる。

4-3) 「ラーマ物語」との関係①：可視化されたエピソード

ラーマ物語との関係で最も注目されるのは、パーブージー叙事詩の中で最も長大でラーヴァナとの対決を含む牝駱駝編である（E6）。ここでは、ランカーでのラーヴァナとの戦

いが可視化されている。そもそもの発端は、ゴーゴーに嫁ぐケーラムから結婚祝いとして、ランカーに飼われているという赤銅色の雌駱駝がほしいという無理難題に始まる。そこで、パドの左端、インダス河あるいは海洋の彼方に位置づけられたランカーに牝駱駝の存在を確かめに偵察に向かったのが、レバーリー（牧畜民）出身の廷臣ハルマルである。彼は、牝駱駝が実際に飼われている証拠としてその毛を持ち帰りパーブーに渡す。一方、ラーマ物語ではハヌマーンが偵察者の役割を担い、ラーヴァナにさらわれたシーターを探しにランカーに向かう。パドには木の陰からシーターを発見し、ラーマの指輪を渡し、ラーヴァナの庭を破壊するハヌマーンも画かれている。パーブーは、十頭二十腕の姿で描かれたラーヴァナと戦う。ラーヴァナは鱔に乗り、その左横にはラーヴァナの妻のマンドーダリーMandodarīが、上部には母親のシコータリーSikotarīが描かれている（図5）。

パーブーはこの戦いに勝利し、牝駱駝をラージャスターンに連れ帰るのだが、なぜこの叙事詩にラーヴァナが登場し、パーブーと戦わなければならなかったのかと言う素朴な疑問が湧く。

4-4) 「ラーマ物語」との関係②：不可視のエピソードあるいは神話的背景

パドに描かれ可視化されたエピソードに対して、その背景にある神話世界からの因縁あるいは登場人物の二重性という視点から、パーブージー叙事詩と「ラーマ物語」との関係性について若干の考察を加えてみたい。

ボーパによる叙事詩語りでは、パーブーはラーマの弟ラクシュマナ Lakṣmaṇa の化身 *avatāra* であり、その宿敵ジンドラーヴ・キーンチャーはラーヴァナの、そしてフルワンティーはラーヴァナの妹シュールパナカー Śūrpaṅakhā の化身とされている [Bharucha 2003: 102-5 ; Smith 2015: 57-64]。すなわち、パーブージー叙事詩における3者関係は「ラーマ物語」からの“因縁”を背負っていると考えられる。

ラーマ物語の中で、ヴィシュヌの化身であるラーマとラーヴァナの因縁は決着がついている。神々が手を焼くラーヴァナを、ヴィシュヌが人間ラーマに転生して倒した後に和解し、2者間の因縁は完結したようにも思われる。しかしながら、ラクシュマナとラーヴァナ及びシュールパナカーの因縁は完結していない。

ヴァールミーキ・ラーマヤナの森林の巻（アラニヤ・カーンダ）では、シュールパナカーの恋が描かれている。ラーマに既婚者であることを理由に拒絶されたシュールパナカーは、今度はラクシュマナに言い寄る。しかし、ラクシュマナは苦行者であることから、女性とは関係を持たないと拒絶。その腹いせに彼女はシーターを襲うが、ラクシュマナに鼻と耳を切り落とされる。シュールパナカーは、兄のラーヴァナにこの兄弟を懲らしめるように頼み、シーターはランカーに拐われていく。

パーブージー叙事詩では、シュールパナカーの化身であるフルワンティーは、ラクシュ

マナの化身であるパーブーと結婚して思いを遂げたようにも思われる。しかし、結婚式は完了せず、一夜を共にしていない。夫となるはずのパーブーは兄のラーヴァナの化身であるキーンチーに殺され、自らはサティーを行う結末となる。パーブーは、自分の剣を自らキーンチーに渡し／交換し、自ら討たれたふしがある。キーンチーに最終的な復讐を果たすのは、兄ブローの息子で甥のルーパナートであり、彼は復讐を果たした後は苦行者となるのである。なお、パーブーの廷臣であるデーラボはハヌマーンの化身であり、登場人物の多くは女神・母神の化身・転生である。

このようなパーブージー叙事詩の背後に、ラーマ物語や神話世界の化身関係が想定され、いくつかの解釈を可能にする。本稿における「読み」もこれら解釈の一つに過ぎない¹⁴⁾。

5. 展望と課題

パーブージー叙事詩についてラージャスターニー語で書かれた記録は、17世紀中葉のナインシーの手になるものがあり、そのヒンディー語翻訳と20世紀初頭のテシットーリの英文抄訳、及びスミスの英文翻訳がある。また、口頭叙事詩のテキストについては、スミスの研究に多くを負っており、書承と口承、ボーパによって異なるエピソード内容や解釈に関する偏差等については十分に検討できていない。また、これまでのジョードプル県やナーガウル県での自身のフィールドワークのデータと合わせた分析等については今後の課題として残されている。

14) ラーマ物語を素材とした書承と口承における偏差と変化、および日本におけるラーマ物語の受容と変容については拙著 [田森1997; 1998] を参照のこと。

資料 (カタカナ表記は原文のまま)

資料 1-1: ボーパの職能 [沖浦 1985: 74-5] (ナトゥラム・ボーパ談)

ナトゥラム・ボーパ (当時19歳。父が20年前ジョードプルからデリーを往復・移住)

「(ボーパが必要とされるのはどのような時なのかという質問に対して)……一番大事なのは、ラージブット、つまり……武將たちが出征する夜だったようです。パブジーがいかに勇敢だったかを彼らに語りきかせ、ラージブットたちはそれをきいて戦場に行ったのです。いまでは、男たちが出稼ぎの仕事などで遠国に出かける時に、パブジーの物語をきかせながら、旅中の無事と仕事の成功を神様にお祈りするのです」

「子供が生まれた時、結婚式などのおめでたい時にも、もちろん行きますが、重い病気にかかってもうダメだという時にも、呼ばれば必ず行きます」

資料 1-2: ボーパの生活・仕事 [沖浦 1985: 72,76] (ナトゥラム・ボーパ談)

「(3年前に他界した父が元気でジョードプルの村とデリーを往復していた頃の話)……初夏から雨期に入りますと、3カ月ぐらいは村に帰ってラクダを使い、田畑を耕すんです」「畑仕事で忙しいと、ひと月に何もしない時もあり、多い月で一カ月十回ほどです。……夜の十時ごろから始め、ずっと一晩中やります。……二組で交代しながら、……1時間ほどやると他の組がかわってやります」

資料 1-3: 語りの内容とボリューム [沖浦 1985: 74]

ナトゥラム・ボーパ

「パブジーの誕生から全部語り出しますと、十二夜分やだけの話が昔あったといわれています。私が覚えているのは、残念ながら一晩分だけです」

テージャビー・ボーパ (当時45歳。ジョードプル出身。ナトゥラムの母)

「私も一晩だけ語れるだけで、今日では十二夜を語れる人はもう誰もいません」

ナトゥラム・ボーパ

「かなり以前から、一人のボーパで語れるのは一晩分だけです。それならば、12人のボーパが集まれば十二夜分の物語が構成できるかということ、そうではありません」

資料 2-1: 絵解き歌「パブジーの誕生」(長 弘毅訳) [林 1985: 17]

じゃ香ただよう花園に

パブジーこの世に生を受く

生まれて、雌獅子の乳を飲み

母カマラーは、ふところぞ

幼きパブジー慈しむ

十と二年の年月過ぎて

パブジー雄々しき若者となり

ラドーダ王家の玉座に着く

資料 2-2: 歌謡パフォーマンス「鳥」(長 弘毅訳) [林 1985: 17]

飛んで行っておくれ、私の黒い鳥よ!

もしも、私の愛する夫が家に戻って来たら

もしも、私の大事な王様が家に戻って来たら

飛んで行っておくれ、外っ国へ、鳥よ!

私の愛する夫の便りを持って来ておくれ

もしも、私の愛する夫が家に戻って来たら

代々、生まれかわって、お前の徳を称えよう、鳥よ!

図版



図1 ボーパのパフォーマンス
ジョードプルのルパーヤン・サンスターンにて筆者撮影 (2008)



FĀBUJĪ, MOUNTED ON KESARĪ KĀLL.

図2 パーブージー像
Mandor Rock Sculpture
[Tod 1987 (1920): 848] より

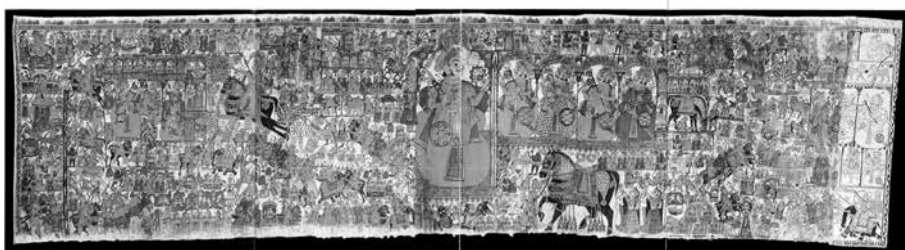


図3 パドの全体像

Pābūjī paṛ by Jaṛāvcand Josī of Bhīlwārā. This very fine paṛ is dated 1938 A. D. and is the property of the Royal Tropical Institute, Tropen museum, Amsterdam. [Shimth 1991: 37] より

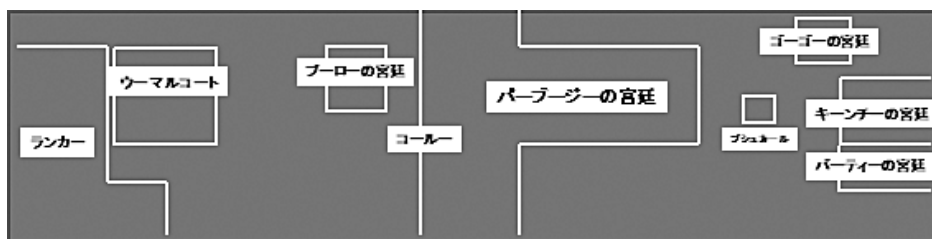


図4 パドの空間配置



図5 ランカーでの戦いと最終決戦
Smith [2005: 96, 172, 133] より

引用・参考文献

- Bhātī, Nārāyaṇasimha, ed. (ラージャスターニー語)
1968-69-74 *Mumhatā Naiṇasī rī Likhī: Māravāra rā paraganām rī vigata*. Jodhpur: Rajasthan Pracyavidya Pratishthan.
- Dūgaṛa, Rāmanārāyaṇa (transl.). (ヒンディー語)
1934 *Muḥaṇota Naiṇasī kī khyāta*. Prayag: Indian Press Limited.
- Sākariyā, Badrīprasād, ed. (ラージャスターニー語)
1984 *Mumhatā Naiṇasī rī khyāta* (bhāg 3). Jodhpur: Rajasthan Pracyavidya Pratishthan.
- Bharucha, Rustom
2003a *Rajasthan: An Oral History* (Conversations with Komal Kothari). Delhi: Penguin Books.
2003b *Rajasthan: A Musical Journey* (CD notes). Jodhpur: Rupayan Sansthan.
- Joshi, O.P.
1976 *Painted Folklore and Folklore Painters of India*. Delhi: Concept Publishing.
- Malik, Aditya
2005 *Nectar Gaze and Poison Breath: An Analysis and Translation of the Rajasthan Oral Narrative of Devnārāyaṇ*. New York: Oxford University Press.
- Neuman, Daniel and Shubha Chaudhuri with Komal Kothari
2006 *Bards, Ballads and Boundaries*. Calcutta: Seagull Books.
- Smith, John D.
1991 *The Epic of Pābūjī: A Study, Transcription and Translation*. Cambridge: Cambridge University Press.
2005 *The Epic of Pabuji*. New Delhi: Katha.
2015 *The Epic of Pābūjī: A Study, Transcription and Translation* (2nd ed.). (bombay.indology.info/pabuji.pdf)
- Blackburn, Stuart H., Peter, J. Claus, Joyce B. Flueckiger and Susan S. Wadley (eds.)
1989 *Oral Epics in India*. Berkeley: University of California Press.
- Tessitori, L P.
1916 “A progress report on the preliminary work done during the year 1915 in connection with the proposed Bardic and Historical Survey of Rajputana.” *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, N.S. 12: 57-116.
- Tod, James
1987 (1920) *Annals and Antiquities of Rajasthan or the Central and Western Rajput States of India*. Edited with an introduction and notes by William Crook in 3vols. Delhi: Motilal Banarsidass, London: Oxford University Press.
- 岩本 裕
1980 『ラーマーヤナ 1』 (東洋文庫376) 平凡社
- 沖浦和光
1985 「ボーパ—砂漠の英雄をたたえる絵とき歌」『部落解放』225: 72-79
- 小西正捷
1988 「南アジア民衆芸能の享受者とパトロン」『日本の音楽・アジアの音楽 第2巻「成立と展開」』254-278, 岩波書店
2001 「絵語り」と語り絵」『インド民俗芸能誌』145-170, 法政大学出版局
- 田森雅一
1997 「桃太郎昔話とラーマ物語：比較研究における課題と読みの可能性」『口承文藝研究』20: 71-82
1998 「日本におけるラーマーヤナの受容と変容」『ラーマーヤナの宇宙』金子量重・坂田貞二・鈴木正崇編著, 198-220, 春秋社
- 林 雅彦
1985 「旅芸人の世界セミナーの一報告—インドの絵解き歌“ボーパ”をめぐる」『絵解き研究』3: 14-20
- 三尾 稔
1995 「異界への道標—神と人をつなぐボーパ」『原インド世界』フジタヴァンテ編, 124-131, 東京美術